

「紀元杉の枝」屋久杉自然館にて公開

1月8日、屋久杉自然館にて、落下する危険があるため切り離された「紀元杉の枝引き渡しセレモニー」が行われました。枝の公開に当たり、米田森林管理署長は、「屋久島や森林について、その成り立ちや現状に関心を持っていただくとともに、貴重な生態系や自然の大切さについて学んでほしい」と挨拶し、除幕となりました。

紀元杉は、縄文杉とともに著名屋久杉の一つとして親しまれており、安房林道を通るバス路線の終点にあるため、気軽に訪れることができ、気軽に訪れることができ、推定樹齢は3千年と知られており、最上部の白骨化した枝（切り離された枝）が特徴的でした。

しかし、昨年3月、屋久島自然休養林の管理・運営を行っている、屋久島レクリエーションの森保護管理協議会が行った危険木調査において、枝の一部がいつ落下するかわからない危険な状況にあると判断されました。そのため、同年4月、高木登攀技術者の資格を持つ樹木医のチームによって切り離され、無事、地上に降ろされたのです。

この枝の取り扱いについては、平成17年に雪の重みで落下した縄文杉の枝と同様、環



除幕された紀元杉の枝

境学習等への有効活用を図り、来館者への普及啓発に供することを目的として、屋久杉自然館で公開・展示することとなりました。展示されている枝は、幅60〜80cm、長さ150cm、重さ約50kg。切り離される前の地上から見た状態で置かれ、裏側も観察することができ、長年風雪に耐え、白骨化した模様と切断部の年輪を観賞すれば、屋久杉の神秘を感じることができるといえます。

なお、同館では平成25年の特別展として、「受けつがれる命「屋久杉展」」「森とともに生きた人々「小杉谷・石塚の半世紀」」が開催されており、屋久杉と人との関わりを学べる展示が森（盛り）だくさんです。

森林管理に関する住民アンケート

昨年9月、小瀬田森林事務所において、小瀬田集落を対象とした森林管理に関するアンケート調査を行いました。この調査は、今後の人工林の整備方針を考える上で、地域の特性を理解し、住民の森林に対する期待や望んでいる森林の姿を把握することが目的です。

調査の結果、「森林が持つ機能の重要度（グラフ①）」について、最も評価が高かったのは「山地災害防止機能」でした。また、「将来的に最も期待する森林の姿（グラフ②）」について、最も評価が高かったのは「保水力が高く山崩れに強い森林」という意見が多く得られました。

従って、人工林についても適切な森林整備を確実に行うことや、広葉樹の導入を図り混交林化を目指す等、保水力の確保や土砂崩壊を防ぐ機能を高めるための森林管理を行うことが重要だと、認識されていることが改めて分かりました。現在の森林を見たとき、今後の課題として、いかにしてその目的に沿った森林の育成管理を進めるかが、改めて問われていると言えそうです。

この度、アンケートにご協力をお願いしました住民の皆様

屋久島の植物



カタバミ (カタバミ科)

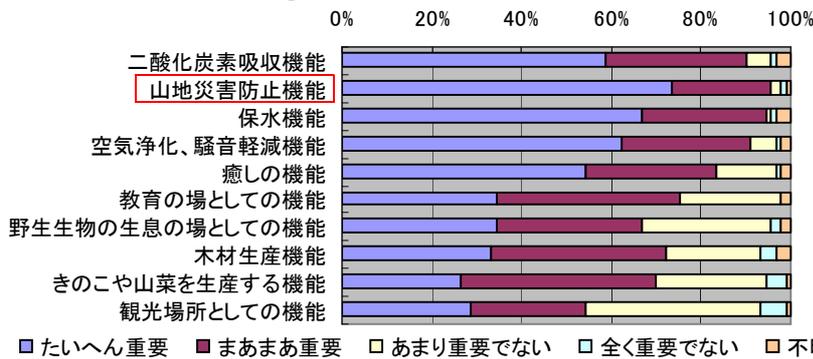
様には深く感謝申し上げます。地域への要望を把握する取り組みは今後も継続的に進め

て参りますので、皆様のご協力をよろしくお願いします。

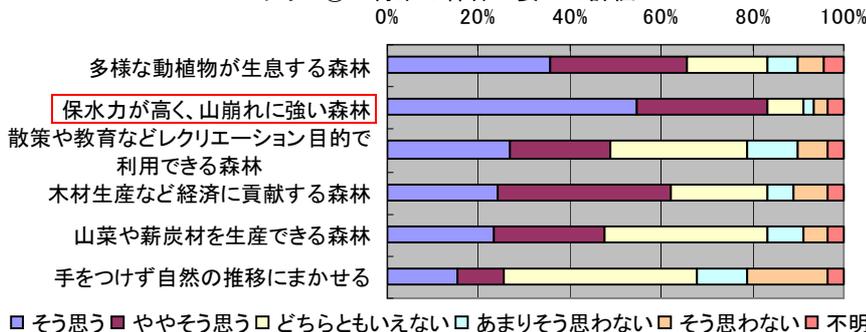
日本全土の道ばたや庭などに多い多年草。茎は根元から何本も出て地を這い、直立した柄をもつ葉を互生する。葉柄の先には、3枚のハート型の小葉がつく。花は黄色で8〜10cmほどの大きさである。

花期 ほぼ1年中

グラフ① 森林が持つ機能の重要度



グラフ② 将来の森林の姿への評価



巾着式網はこわなキヤラバン

昨年12月、九州森林管理局森林技術センターが開発した簡易なシカ捕獲技術「巾着式網箱罟」のデモンストレーションが、安房公民館にて行われました。

「箱罟」とは、野生動物を捕獲するために使用される箱状の罟であり、有害鳥獣として捕獲に必要なニホンジカに対しても使用されています。しかし、一般的に使用されている箱罟は、鉄製で重量があり、価格も5〜10万円と高価です。また、組み立てと設置には、3〜4人程度の人手が必要であり、設置場所が車の入れる箇所に限定されるという課題がありました。

森林技術センターでは、この課題を改善するべく、できる限りの軽量化・ポータブル化・低コスト化を目指し、新たな箱罟の開発に取り組んできました。

そして、1人でも運搬・設置が可能であり、材料費も1万円以下に抑えることができる、「巾着式網箱罟」を開発することに成功しました。この度、シカ被害対策が実施されている各地において、新たな箱罟の紹介と普及を兼ねた、「巾着式網はこわなキヤラバン」が開催されることになったものです。

当日は、島内から猟友会会員の皆様をはじめ、鳥獣保護に携わる行政関係者等約60名が参加し、箱罟の仕組みや設置方法の説明を受けました。参加者からは、「実際に現場での捕獲結果

屋久島生態系モニタリング

屋久島西部地域におけるヤクタネゴヨウ生育調査（平成21年度）

**ヤクタネゴヨウ群落調査②470mプロット

【プロットの状態】急峻な地形で沢の源頭部近くの小尾根に露岩地。両側は切り立った崖で、風通しがよく乾燥気味の場所。地形的には、照葉樹の旺盛な生育が困難な場所だが、実際はウラジロガシやイスノギ、マテバシイ、クロバイ、タイミンタチバナなどの照葉樹の樹冠が発達しつつあり、足元には照葉樹の落葉腐植層(リター層：腐葉土)が厚く堆積。本プロットには、5本のヤクタネゴヨウ生立木(プロット外)と2本の立枯木(プロット外)がある。本プロットにおいては、標高420m・560mプロットと相違し、ヤクタネゴヨウ生立木へのシロアリ穿入痕と根株腐朽が見られないが、風衝による樹形の変形木が多い。

【5年前との経年変化】前回と今回のプロットは、同一箇所ではないが、林分構造(階層構造や林分の発達段階等)は近似している。今回は低木層の多くがヤクシカ摂食等の影響により、植被率・種数・本数いずれも少ない。摂食を比較的多く受けているタイミンタチバナ・マテバシイ・ウラジロガシの本数が減少し、優占種がタイミンタチバナからサクラツツジに変化。また、高木性樹種の稚樹が見当たらなかった。草本層優占種は前回のタイミンタチバナから今回はヤクシカ不食種のヨゴレイタチシダに変化。一方、一部の低木層は成長して亜高木層へ、一部の亜高木層は成長して第2高木層へと移動した直後と思われる。今回のプロットの方が亜高木・第2高木層の種数や本数が多く、第2高木層の植被率の多さが顕著である。このように亜高木・第2高木層の照葉樹の生育が旺盛なため、その影響でヤクタネゴヨウの根元付近の土壌が、かつての貧栄養土壌から照葉樹の落葉腐植層が厚く堆積した土壌へと変化しつつあった。また、照葉樹の樹冠の発達は、林床への光の到達を遮り、ヤクタネゴヨウの実生苗の発芽とその後の生育に影響を与えているものと考えられ、実生苗は確認できなかった。

屋久島の野鳥

《屋久島の猛禽》

「猛禽類」とは、鋭いツメやクチバシを持ち、他の動物やその死骸を食べる鳥達のことを言います。今回は、屋久島でも比較的目的にする機会が多い猛禽たちを紹介します。

【トビ】最も身近な猛禽であり、街にいても上空を旋回する姿を見かけます。釣り場では、捨てられた魚を食べてくれる掃除屋さんです。

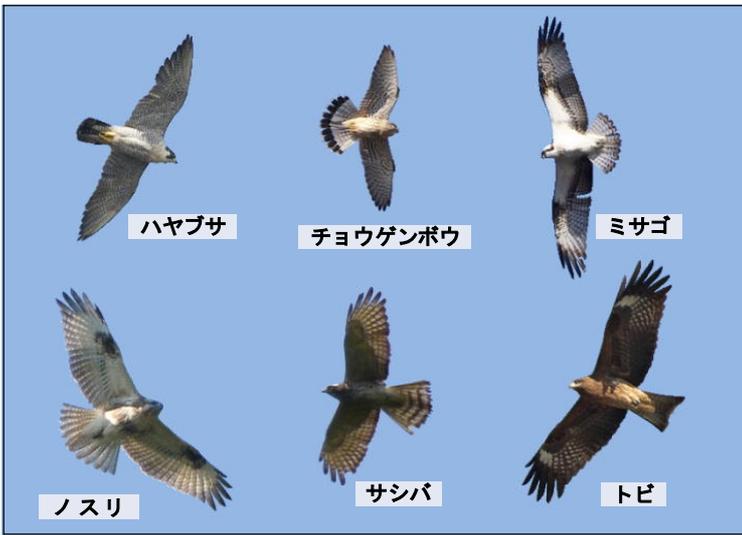
【ノスリ】トビと同じくらいの大きさですが、腹巻きのような模様と丸みのある尾羽が見分けのポイントです。農耕地の周辺でよく見かけます。

【ミサゴ】魚を主食としているため、獲物を見つけると水中へダイブします。白い体色と褐色の過眼線が特徴的なので、識別は容易です。

【ハヤブサ】他の鳥類を捕らえて食べるため、屋久島の海岸線では、渡りのヒヨドリを追う姿が観察できます。狩りの際に急降下する速度は、鳥類一とされています。

【チョウゲンボウ】ハヤブサの仲間で、小鳥や昆虫等の小動物を捕食します。電柱等に止まって獲物を探ることが多いですが、時折、停空飛行(ホバリング)をして獲物に狙いを定める姿も見かけます。

【サシバ】春・秋の渡りの時期に、集団で屋久島を通過しますが、少数の個体は島内でも越冬するようです。百羽を越える群れが竜巻のように飛翔する、「タカ柱」は壮観です。



職員が「シカ」になったのデモンストレーション

を見た」といった声があり、今後、屋久島森林管理署では「巾着式網箱罟」の設置を試験的に行うこととしています。

縄文杉クロン苗の養殖決まる

1月22日、公益財団法人屋久島環境文化財団は、屋久島環境文化村センターにて公開している縄文杉のクロン苗の愛称を、「もじよん杉」に決定しました。この苗は、積雪のため落下した縄文杉の枝「いのちの枝」から育成したクロン苗で、多くの方々に見ていただき、屋久島の自然環境への理解に繋がればと、昨年11月に屋久島森林管理署が当財団へ提供したものです。

の愛称が島内外から寄せられ、鹿児島市在住の川路裕子さんの作品「もじよん杉」が選定されました。「もじよ」とは鹿児島の方言で「かわいい」の意。島内外から多くの方々に親しまれるようにと「じよもん杉」をひねって考えられたそうです。屋久島の玄関口にあり、気軽に訪れることができる「もじよん杉」。是非皆様も会いに行かれています。いかがでしょうか。

